

# *Mandeville's Travels* における VS 語順

小林 美樹

## 要 旨

OE は原則的に V2 言語であり、主語以外の要素が文頭に置かれた文では高頻度に VS 語順が観察される。しかし ME 中に英語は非 V2 言語へと変化し、それに伴い VS 語順の使用は限定されていく。本稿では 15 世紀の *Mandeville's Travels* に見られる VS 語順を観察し、この作品において VS 語順がどの程度生産的であったのかを考察する。ディスコース上の働きとしては、主要な叙述と補助的な説明部分に関し VS 語順と SV 語順の使い分けが見られる箇所があり、*Mandeville's Travels* においては、語順が OE と同様のディスコース上の機能を果たす場合があることが観察された。しかし *Mandeville's Travels* において VS 語順がこのような機能を果たすことは多いとは言えず、VS 語順のもつディスコース上の機能は OE ほど活発なものではないようである。

一方でこの作品において VS 語順に現れる語彙動詞は多様性を示す。また同じ 15 世紀の作品である *Malory* とは異なり、他動詞が目的語前置文において [OVtS] という VS 語順で使用される場面が限定されていない。*Mandeville's Travels* においては、他動詞の VS 語順が現れる頻度は OE と比較して半減しているものの、この語順の量的な減少はまだ質的な変化を伴っていない段階にあると考えられる。

## 1. はじめに

本稿では ME 期にフランス語から翻訳された作品の一つである *Mandeville's Travels* (以下 *MT*) を資料とし、この作品に見られる VS 語順について考察する。

始めに VS 語順がもつディスコース上の機能を観察し、その後他動詞の VS 語順に焦点を当てる。他動詞の VS 語順は現代英語では原則的に非文法的であるが、V2 言語の特徴を示す OE においては、主語以外の要素が文頭に置かれた文において、かなりの割合で他動詞も VS 語順に起こっていた。そしてその後 ME 中にこの語順は消失に向かう。本稿の後半では ME 後期の作品である *MT* において、他動詞の VS 語順がどの程度生産性を保っていたのかを観察する。

まず次節で ME 期にフランス語から英語に翻訳された作品における、フランス語の統語的影響を考察した Haerberli (2014) の研究を概説する。続いて 3 節では、VS 語順が OE においてディスコース上果たしていた機能が、ME 後期の *MT* においても認められるかどうかを探る。そして 4 節では *MT* における他動詞の VS 語順を、①文頭要素が副詞(句)であるもの、②文頭要素が目的語であるもの、の順で観察し、[X Vt S] という語順がこの作品においてどの程度生産性を保っていたのかを考察する。また *MT* を *Malory* と比較することにより、この語順が英語において原則的に非文法的になっていく過程における、使用頻度という量的な変化と、この語順に現れる動詞の種類の変容という質的变化の関係を考えたい。最後に 5 節で全体のまとめを行う。

## 2. 翻訳作品におけるフランス語の影響 (Haerberli (2014))

本稿で考察の対象とするのは 15 世紀初頭にフランス語版から英訳されたとされるコットン版の *Mandeville's Travels (MT)* である。ME 期に書かれた主要な作品には、*MT* を始め、*Brut*、*Malory* などフランス語からの翻訳作品が含まれる。このような作品の統語上の特徴を研究する際には、そこに観察される英語の統語現象が、翻訳元言語であるフランス語の統語的特徴に影響を受けている可能性があることも考慮に入れる必要がある。Haerberli (2014) は 1400 年頃にフランス語から英語に訳された作品である *Brut* をそのフランス語(アングロ・ノルマン語)版と比較し、英訳 *Brut* に現れる特徴的な語順 (1(i-ii)) に関して、フランス語か

らの統語的影響がどの程度認められるのかを考察している。

- (1) 同時期の作品と比較して、*Brut* においては：
  - (i) 副詞の位置に関し、[S Adv V] という語順の頻度が顕著に高い。
  - (ii) 目的語代名詞が動詞に先立つ [S O(pro) V] という語順の頻度が極めて高い。

まず (1(ii)) については、フランス語の影響は考え難いということである。OE において高頻度に見られた [S Adv V] という語順は ME 中に減少し、[S Adv V] は [S V Adv] との対比において 14 世紀半ばから 15 世紀には 10% 以下にまで下がり、その後再び増加している。1400 年頃の作品である *Brut* は [S Adv V] が 26.6% であり、その当時の平均的な割合よりかなり高い。しかし以下に示すように、フランス語版との対照研究から、これは翻訳元言語からの影響とは考え難いとしている。

Haerberli の資料に起こる *Brut* の [S Adv V] 61 例のうち、フランス語版でも [S Adv V] となっているのは 7 例のみであり、31 例においてはフランス語版では副詞が現れていない。また 15 例ではフランス語版では英語版とは異なる [S V Adv] という語順が現れており、従って *Brut* の特徴である (1(i)) は、フランス語の統語が影響した結果ではないということである (Haerberli (2014: 3-7))。

一方で (1(ii)) に関しては、目的語代名詞が規則的に定形動詞に先行するフランス語からの影響が考えられるとしている。しかし、助動詞が現れる文においては、英語版とフランス語版では目的語代名詞が典型的に現れる位置が異なるとのことである。当時のフランス語においては目的語代名詞は原則的に助動詞に先行し、[S O(pro) Aux V] となる。一方英語においては、Haerberli の調査によると、翻訳ではない作品において、この [S O(pro) Aux V] という語順が最後に見られるのは英語版 *Brut* が書かれた 1400 年頃の 150 年前である。従って *Brut*

英訳当時は英語において、目的語代名詞が助動詞に先行する [S O(pro) Aux V] という語順は既に非文法的であったということになる。そしてこの [S O(pro) Aux V] という語順（フランス語においては原則的である一方、英語においては非文法的であったと考えられる語順）は、英語版 *Brut* では極めて低い頻度でしか起こっていない。

[S O(pro) Aux V]、[S Aux O(pro) V]、[S Aux V O(pro)] の3通りの語順のなかで、英語版 *Brut* に最も多く現れるのは、目的語代名詞が定形助動詞と動詞の不定詞の間に起こる [S Aux O(pro) V] である。Haerberli の資料に現れる英語版 *Brut* の [S Aux O(pro) V] は 71 例あり、そのうち 1 例のみがフランス語版と英語版で同じ語順である。残り 70 例は、①フランス語版では [S O(pro) Aux V] となっているもの、②フランス語版では助動詞が現れず、[S O(pro) V] となっているもの、③フランス語版では目的語が存在しない表現となっているなどフランス語から英語に意識されているもの、がそれぞれおよそ三分の一ずつということである。①と②に関してはフランス語の語順の影響を受けている可能性を完全に否定することは出来ないとする一方で、*Brut* の英語翻訳者は翻訳の過程において単純に元言語の構造を模倣していたわけではなく、また英語において当時非文法的であった語順 [S O(pro) Aux V] を使用することには消極的であったとしている (Haerberli (2014: 7-16))。

Haerberli (2014) はその結論のなかで、翻訳作品を資料として、英語の歴史のある特定の時点において文法的であった構造と非文法的であった構造を判断することに必ずしも大きな問題は無いのかもしれないと述べている。また特に *MT* に関しては、目的語代名詞の位置に関して、フランス語の影響は全く見られないとしている。Kroch and Taylor (2000) によると、*MT* の翻訳者の英語は優れているものの、フランス語の原文については誤解している部分もあるということである。Haerberli は、*MT* の英語翻訳者はフランス語に特に習熟していたわけではない可能性もあると考え、また、翻訳元言語の言語的特徴が翻訳先言語にどの程度統語

的に反映されるかは、翻訳者が翻訳元言語にどの程度精通しているかに依ると考えることも可能であろうとしている。

後に4節で示す *MT* の主語と動詞の倒置現象が、当時の英語の文法、またこの作品の英語翻訳者本人の文法をどれほど純粋に映し出しているのか、またフランス語の影響がどの程度のものであるのかは明らかではない。しかし上に示した Haeblerli (2014) の研究、考察に従えば、原則的には翻訳者は自分の文法で許されない語順は使用しない、そしてフランス語の理解が十分ではない可能性がある *MT* の翻訳者に関しては、フランス語がその英訳に統語的な影響を与えた可能性は特に高くはないと考えて良いのかもしれない。

### 3. 場面展開における VS、SV 語順

本節では *MT* において VS 語順がディスコース上担っていた機能について考察する。OE は厳密な意味での V2 言語ではないが、主語が代名詞ではない場合、即ち名詞句主語が現れる場合には、原則的に V2 となり、副詞等、主語以外の要素が文頭に置かれた文では VS 語順が一般的である。この VS という語順は統語的に V2 を実現するための結果であると同時に、ディスコース上の様々な役割も担っていたと考えられている。Brevik (2003) は OE における VS 語順は提示機能や、その他様々な種類の語用論的情報を伝える機能を果たしていたとしている。また Hopper (1979) は語順がディスコース上で果たす役割について考察し、OE においては主要なストーリーラインの出来事を述べる部分に VS/OV 語順、話の導入部分やストーリーラインに詳細な情報を加えるような部分では SV 語順が現れるとしている。

以下に示すのは Anglo-Saxon Chronicle 755 年の項の初めの部分である。Hopper によると、(2a) はそれに続く (2b) 以降で展開されるキネウルフとキネヘアルドの戦いへと話を導くための説明部分であり、従って (2a) では SV 語順が現れ、755 年の項のメイン・イベントを記述する (2b) 以降では VS/OV 語順が現れると

いうことである。(2a-b) では主節の主語に下線、動詞の下に波線を引いて太字で示し、その部分に現代英語訳を示す。(3) の現代英語訳は Hopper (1979) からのものである。

(2a) 755. Her Cynewulf ~~benam~~ Sigebryht his rices ond West Seaxna  
Cynewulf deprived

wiotan for unryhtum dædum, buton Hamtunscire; ond he ~~hæfde~~  
he held

þa oþ he ofslog þone aldor mon þe him lengest wunode; ond hiene

þa Cynewulf on Andred ~~adrafde~~, ond he þær ~~wunode~~ oþ þæt hie  
Cynewulf exiled he dwelled

an swan ofstang æt Pryfetes flodan; ond he ~~wræc~~ þone aldor mon  
he avenged

Cumbran; ond se Cynewulf oft miclum gefeohtum ~~fecht~~ wiþ  
Cynewulf fought

Bretwalum; ond ymb xxxi wintra þæs þe he rice hæfde, he ~~wolde~~  
he would

~~adrafan~~ anne æpeling se was Cyneheard haten, ond se Cyneheard  
exile Cyneheard

~~was~~ þæs Sigebryhtes broþur;  
was

(2b) ond þa ~~geascode~~ he þone cyning lytle werode on wifcyþþe on Merantune,  
discovered he

ond hine þær berad, ond þone bur utan beeode . . .

(3) In this year, Cynewulf and the West Saxon elders deprived Sigebryht of his kingdom for unrighteous deeds, except Hampshire; and he held that until he slew the alderman who stayed with him the longest. And then Cynewulf exiled him to the Weald, and he remained there until a herdsman stabbed him to death at

Priffet's Flood, and he was avenging the alderman, Cunbra. And this Cynewulf often, in mighty battles, fought against the Cornishmen. And 31 winters after he took the kingdom, he resolved to exile a nobleman who was called Cyneheard, and this Cyneheard was Sigebryht's brother.

And he [Cyneheard] found the king with a small band of men visiting a mistress at Merton, and surprised him there, and surrounded the hut outside...

(Hopper (1979: 222 ))

(2b) およびそれ以降でキネウルフとキネヘアルド、またキネウルフの臣下とキネヘアルドの戦いが描かれる。その話が展開していく中で、主要な点においてVS/OV 語順が現れる。そのうち VS 語順の例を (4) に示す。

(4) geascode he (he discovered)

on geat se cyning (the king understood)

on fundon þæs cyninges þegnas (the king's men realized)

þa þider urnon swa hwelc swa þonne gearo wearþ & radost

( then thither ran whoever was then ready and quickest)

gehierdu þæt, þæs cyninges þegnas (the king's men heard that)

þa ridon hie þider (then they rode)

þa gebead he (then he offered)

Hopper (1979) は継続相の動詞 (ricsode 'reigned', sæt 'remained' 等) と瞬間相の動詞 (geflimede 'put to flight', ofslog 'slew' 等) が、それぞれ VS、OV、SV 語順で現れる比率を調査し、継続相の動詞は瞬間相の動詞のおよそ二倍の率で SV 語順に現れるということを示している (Hopper (1979: 224-225))。話の展開において主要な出来事は一般的には瞬間相の動詞で記述されることが多く、従って、瞬間相

の動詞は継続相の動詞と比較して VS/OV 語順で現れることが多くなると考えられる。(4) に VS 語順の例として挙げた動詞には認識動詞も含まれるが、上の文脈においては、「その瞬間に気づく、理解する」という意味であると解釈でき、瞬間相の動詞として働いていると見なして良いであろう。

OE で観察される V2 現象は ME になって次第に減少し、15 世紀に失われたとされる (Haerberli (2002), Komen et al (2014))。また、SV 語順の確立に伴う VS 語順の減少の中で、ME 期の VS 語順は OE ほどには頻繁にディスコース上の役割を担わなくなったと考えられる。各文がストーリーの展開にどのように関与するかにより語順が選択されるという、(2a-b) に見られるような現象も、ME 中に見られなくなっていったと考えられる。

MT は旅先の各地で見聞したことがらを記述していくという形になっているため、ある土地の存在やある人物・事物の存在を紹介する部分が多い。例えば MT と同様に ME 後期の作品である *Malory* のような、馬上槍試合が頻繁に行われ、動的な場面展開が各所で見られる作品とは異なり、MT はストーリーが動的に展開して行くという箇所は多くはない。従って、(2a-b) に見られるようなタイプの語順のシステムが、この作品において生産的なものであるのかどうかを判断するのは難しい。しかし (5) に示すように、主要な叙述と補助的な説明部分に関し VS 語順と SV 語順の使い分けが見られる箇所もあり、MT でも語順が OE と同様のディスコース上の機能を果たす場合があることが観察される。以下の (5) では直接話法の部分以外に関し、主語には下線、動詞の下には波線を引いて太字で示す。

- (5) And þan seyth the Officeres: Now pees, lysteneth. And after þat seyth anoþer of the Philosophres: Euery man do reuerence & enclyne to the Emperour þat is goddess sone & souerayn lord of all the world, for now is tyme; & þanne euery man boweth his hed toward the erthe. And þanne commandeth the same



**Philosophre** a3en: STONDETH VP, & **bei don** so. And at another hour **seyth** **anober Philosophre**: Putteth 3oure litiff fynger in 3oure eres, And anon **bei don** so. And at another hour **seyth anober Philosophre**: Putteth 3oure hond before 3oure mowth, And anon **bei don** so. And at anober hour **seyth anober Philosophre**: Putteth 3oure hond vpon 3oure hede, And **bei don** so. And after þat **he byddeth** hem to don here hond away & **bei don** so. (MT 154: 14-27)

‘And then **say the officers**; Now peace! listen! And after that, **saith another of the philosophers**; Every man do reverence and incline to the emperor, that is God’s Son and sovereign lord of all the world! For now is time! And then **every man boweth** his head toward the earth. And then **commandeth the same philosopher** again; Stand up! And **they do** so. And at another hour, **saith another philosopher**; Put your little finger in your ears! And anon **they do** so. And at another hour, **saith another philosopher**; Put your hand before your mouth! And anon **they do** so. And at another hour, **saith another philosopher**; Put your hand upon your head! And after that **he biddeth** them to do their hand away. And **they do** so.’

(5) に引用した部分では、役人や賢者が次々に指示を出し、人々がそれに従う様子が記述されている。役人や賢者が新たな指示を出す部分では VS 語順、その指示に人々が従う様子が述べられている部分では SV 語順が現れている。但し、「頭の上に置いた手を下ろせ」という最後の指示は、その一つ前の「片手を頭の上に置け」という指示と一体となったものであり、その手をおろせという最後の指示においてストーリー上の場面転換は生じておらず、従って ‘**he byddeth**’ と、SV 語順が現れていると考えられる。

(5) は主要な場面展開の叙述と補助的な説明部分に、それぞれ VS 語順と SV 語順が現れる例と見なすことが出来るが、VS 語順は指示を出す場面、SV 語順は

その指示に従う場面という決まったパターンの連続であるため、この (5) の例をもってして、(2a-b) に見られるような OE の語順のシステムが *MT* において生産的なものとして機能していたとまでは言えないであろう。しかし 4 節以降に示すように、*MT* で観察される倒置現象は、そこに現れる語彙動詞の多様性という点で、この作品と同じ 15 世紀の翻訳作品である *Malory* の倒置現象と比較して、より OE 的な特質を示している。このような特質と合わせて考えると、本節で検討した主要な場面展開の記述と付随的な出来事の記述に関する VS 語順と SV 語順の使い分けが示す OE 的な側面は、V2 現象が消失に向かった ME 後期において、*MT* が特異的であるということを示していると言えるだろう。

## 4. *Mandeville's Travels* の倒置構文

### 4.1. OE 的な古い語順

次節から *MT* に見られる様々なタイプの VS 語順の中で、OE では一般的に起こっていたが、現代英語では原則的に非文法的となったタイプの VS 語順を考察する。それに先立ち本節では、どのようなタイプの語順が現代英語には起こらない、OE 的な古い語順であるのかを明らかにする。そのために以下では現代英語で許される VS 語順のタイプと OE で見られる VS 語順のタイプの重なりや相違を考える。

(6) のようなタイプの倒置は現代英語に起こるが、(7) のような倒置は現代英語では許されない。

- (6) a. [Plainly detectible] were the scars from his old football injury.
- b. [In this rainforest] can be found the reclusive lyrebird.
- c. [Across the river] lived seven dwarfs.
- d. [Now] comes the time to make peace.
- e. [Thus] ended his story.

f. [In the year 1748] died one of the most powerful of the new masters of India.

(Haeberli (2010:146))

(7) \* [There] bought a man a house.

(Zwart (1991: 393))

(6) は自動詞構文または受動構文、(7) は他動詞構文である。自動詞構文や受動構文に関しては、述語が前置された *be* 動詞構文 ((6a)、場所句が前置された受動構文や非対格動詞構文 (6b-c))、また、[Now]、[Thus]、[In the year 1748] のような副詞が文頭に置かれた文 ((6d-f)) において、現代英語でも VS 語順が可能である。一方で他動詞は、下の (8) においてのように、目的語が場所句として働き、出現や存在を表す非対格動詞のような意味あいでも用いられるのでない限り、原則的に現代英語では倒置語順に起こらない。

(8) There crossed her mind a most horrible thought. (Kuno and Takami (2004: 49))

OE は基本的に V2 言語であり、多くの場合定動詞が文頭から 2 番目の位置に置かれ、また文頭には主語以外にも様々な要素が起こる。従って OE においては、現代英語では起こらなくなった様々なパターンの XVS 語順が見られる。他動詞とその主語の VS 語順もその一つである。OE において否定辞、疑問詞、また *þa* ‘then’ などの副詞は、文頭に置かれると極めて高確率に VS 語順を引き起こすが、Haeberli (2010) の調査によると、これら以外の語句が文頭に前置された主節においても、OE においては約 60%の割合で他動詞とその名詞句主語の間で VS 語順が起こっているということである。Haeberli は、OE については *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*、ME については *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English 2* を用いたコーパス調査により、VS 語順の割合を通時的に示している。この調査によると、OE において約 60%であっ

た他動詞と名詞句主語の VS 語順の割合は、15 世紀には 12.4%にまで減少している。なお *MT* においては、その割合は 34.0%ということである (Haerberli (2010:147-148))。

次節以降で *MT* の語順を考察する際、現代英語において標準的には起こらなくなった以下の (9(i)-(ii)) を「OE 的な古い語順」とみなす。

(9) OE 的な古い語順 (ME 期に次第に消失に向かった語順) :

(i) 他動詞とその主語の VS 語順

(ii) ①be 動詞を伴う文での述語前置、②受動文や非対格動詞が現れる文での場所句前置、③時の副詞句や *thus* などのある特定の副詞が文頭位置を占めること、これら以外の要因で引き起こされる VS 語順

(小林 (2014: 9))

#### 4. 2. 動詞による分類

上に述べたように原則的に V2 言語であった OE においては、主語以外の要素が文頭に置かれた文では他動詞もごく一般的に XVS 語順に起こっていたが、ME 期に英語が V2 言語でなくなるとともに、他動詞の VS 語順は減少し、現代英語になると、(7) が示すように、他動詞は基本的に倒置語順に起こらなくなった。

(8) のように動詞句全体で出現や存在を表す場合を除き、他動詞は VS 語順に起こらない。他動詞の VS 語順は OE 的な古い語順であり、ME 期はこの語順が次第に消滅に向かっていた時期である。本節では、ME 後期の作品である *MT* においてこの OE 的な古い語順がどの程度の生産性を保っていたのかを考察する。

まず *MT* における VS 語順の全体像をつかむために、この作品において最も一般的に見られる VS 語順の例を示す。他の ME 期の作品と同様に、*MT* においても非対格動詞と受動態は XVS 語順に起こることが多い。(10-12) が非対格動詞の例、(13-14) が受動態の例である。

- (10) And of þeise .iiij. greynes **sprong a tree** as the aungel seyde þat it  
scholde [growe] (MT 7:23-25)  
'And of these three grains sprang a tree, as the angel said that it should grow'
- (11) In þat toun **dwelled Abraham the Patriark** a longe tyme (MT43:6-7)  
'In that town dwelled Abraham the patriarch, for a long time'
- (12) And in to þat see **sonken the .v. cytees** be wratthe of god (MT 67: 28)  
'And into that sea sunk the five cities by wrath of God'
- (13) After þat **was the sone of Elphy chosen** to ben Soudan (MT 23:1-2)  
'After that was the son of Elphy chosen to be soldan'
- (14) And in þat roche **is printed the forme of his body** (MT 41:8-9)  
'And in that rock is printed the form of his body'

また現代英語においてそうであるように、*MT*においても助動詞を含む文はVS語順に起こりやすい。

- (15) This holy cros **had the Jewes hydd** in the erthe vnder a roche of the mownt of  
Caluarie (MT 7:33-34)  
'This holy cross had the Jews hid in the earth, under a rock of the mount of  
Calvary'
- (16) And þan **most þei let carye** here vitaylle vpon the yse with carres þat haue no  
wheeles þat þei clepen Seleyes (MT 83:34)  
'And then must they let carry their food on the ice with cars that have no  
wheels, which they call sleighs'
- (17) þefore **wolde he make** the temple in þat place (MT 57:24)  
'therefore would he make the temple in that place'

ME 期の他の作品にも一般的に見られるこのような VS 語順に加えて、MT では他動詞の VS 語順も多く見られる。また特筆すべきことは多様な他動詞が VS 語順に起こるということである。(15-17) は助動詞と他動詞の不定詞が共起する文における VS 語順の例であるが、以下には助動詞を含まない他動詞 VS 語順の例を挙げる。

- (18) And þerfore **hath** the white thorn many vertues (MT 8:35)  
 ‘And therefore hath the white thorn many virtues’
- (19) þerfore **made** þei the ouerthwart pece of pal (MT7:1-2)  
 ‘therefore made they the overthwart piece of palm’
- (20) And þere **maken** men grete festes of hym euery 3eer as þough he were a seynt.  
 (MT 10: 19-20)  
 ‘And there make men great feasts for him every year, as though he were a saint’
- (21) & þere **reysed** he Jonas the wydwes sone from deth to lyf (MT 18: 23-24)  
 ‘and there raised he Jonas, the widow's son, from death to life’
- (22) Before the zate of þat cytee **reysed** oure lord the wydewes sone  
 (MT 77:9-10)  
 ‘Before the gate of that city raised our Lord the widow's son’
- (23) Þere **toke** Joseph oure lady to wyf whan sche was .xiiij. 3eere of age  
 (MT 75: 3-4)  
 ‘There took Joseph our Lady to wife, when she was fourteen year of age’
- (24) And þere **offred** first Melchisedech bred & wyn to oure lord (MT 57: 19-20)  
 ‘And there offered first Melchisadech bread and wine to our Lord’
- (25) And þere **laft** oure lord his disciple (MT 63: 24)  
 ‘And there left our Lord his disciples’
- (26) And þere **let** IULIANUS APOSTATA dyggen him vp

‘And there let Julianus Apostata dig him up’

(27) þerfore **bare oure lord** his surname of þat town (MT 75: 2-3)

‘therefore bare our Lord his surname of that town’

(28) And þerfore **seye I** of this folk þat ben so trewe & so feythfull,

þat god loueth hem (MT 197: 33-35)

‘And therefore say I of this folk, who are so true and so faithful,  
that God loveth them’

(18-28) が示す様に、*MT* においては様々な他動詞が VS 語順に起こる。(18)の ‘have’、(25) の ‘leave’、(27) の ‘bear’ はこれらの文において他動性が低く、非対格動詞的な意味合いを持つが、(18)、(25)、(27) 以外の例に現れる他動詞は他動性が高い。*The Penn- Helsinki Parsed Corpus of Middle English 2* を用いた Haerberli (2010) の調査によると、文頭の要素が疑問詞、否定辞、*then-group* 以外であり、かつ主語が代名詞ではない場合、*MT* における他動詞と名詞句主語の VS 語順の割合は 34.0%であり、これは例えば同じ 15 世紀の作品である *Malory* の 14.9%と比べるとかなり高い。

*MT* においては、他動詞の VS 語順は、(22) のように名詞句主語の場合にも、また (21) のように代名詞主語の場合にも見られる。文頭要素に関しては、*þere* ‘there’、*þerfore* ‘therefore’ のように一語である場合も、(22) の *Before the zate of þat cytee* ‘before the gate of that city’ のように副詞句である場合も、また次節で示すように目的語である場合にも VS 語順が起こる。OE 以来、代名詞主語は名詞句主語よりも VS 語順に起こることが少ないので、主語が代名詞である場合も含めると、*MT* の他動詞の VS 語順は Haerberli (2010) の示す 34.0%よりも低くなると考えられる。しかし (18-28) が示すように、現れる動詞の多様性からしても、この作品における他動詞の VS 語順はかなり生産性が高いものであり、これはこの作品が書かれた ME 後期としては特異的な現象である。次節ではさらに文頭要素と

いう観点から、この語順の生産性の高さを検証する。

#### 4.3. 文頭要素

4.1 節で見たように、(9 (ii)) の①から③のような環境では現代英語でも倒置が可能である。

(9) OE 的な古い語順 (ME 期に次第に消失に向かった語順) :

(i) 他動詞とその主語の VS 語順

(ii) ①be 動詞を伴う文での述語前置、②受動文や非対格動詞が現れる文での場所句前置、③時の副詞句や *thus* などのある特定の副詞が文頭位置を占めること、これら以外の要因で引き起こされる VS 語順

(9)から判断すると、最も現代英語で起こり難い倒置語順、即ち ME 期にかなりの程度減少したであろうと考えられる倒置語順は、(9(i)) と (9(ii)) の条件が重なったタイプ、即ち他動詞構文において、時の副詞句や *thus* などのある特定の副詞が文頭位置を占めていない場合に起こる VS 語順ということになる。本節では前節に引き続き *MT* における他動詞の VS 語順を観察するが、(18-28) に挙げた例とは異なり、目的語が文頭に前置されたものについて考察する。ME 以降時代が進むにつれ、目的語前置の文は、*þere* ‘there’ や *þerfore* ‘therefore’ などが文頭に現れる (18-28) のような文と比較して、倒置語順を引き起こす力がさらに弱くなっていったパターンと考えられる。

しかし *MT* では、文頭に目的語が現れる文において他動詞が VS 語順に起こることが珍しくない。また (29-38) が示すように、この語順に見られる他動詞は一部のものに限られているわけではなく、*believe*、*find*、*found*、*have*、*know*、*let* (*let make*)、*take*、*win* など多種類の動詞が [O Vt S] 語順に起こる。



- (29) *þat* beleueu all sarazines (MT 84: 25)  
'and that believe all Saracens'
- (30) & *þat* fynde þei written (MT 7:13)  
'and that find they written'
- (31) *þat tour* founded kyng Nembroth þat was kyng of þat contree (MT 25: 18-19)  
'That tower founded King Nimrod that was king of that country'
- (32) And *þat* plentee haue þei be the myracle of god (MT 39:1-2)  
'And that plenty have they by the miracle of God'
- (33) And **this** crowne had cris on his heued whan he was don vpon the cros (MT 9: 17-18)  
'And this crown had Christ on his head, when he was done upon the cross'
- (34) And *þat* knowe we wel be oure prophecyes (MT 89: 19)  
'And that know we well by our prophecies'
- (35) *þat castell* let make kyng Baldwyn (MT 70: 7-8 )  
'That castle let make King Baldwin'
- (36) And *þat* token þei sumtyme from the Emperour (MT 16: 16)  
'and that took they sometime from the emperor'
- (37) *þat citee* tok Iosue be myracle of god & commandement of the Angel (MT 65: 12-13)  
'That city took Joshua by miracle of God and commandment of the angel'
- (38) *þat citee* wanne þe Turkes fra þe emperour of Constantinople (MT 215:4-5)  
'That city won the Turks from the Emperor of Constantinople'

これらの例において前置されている目的語はどれも旧情報を表し、*that* 一語である場合と、*þat tour* 'that tower' のように名詞句である場合とがある。また代名

詞主語も名詞句主語もどちらも動詞の後位置に現れ得る。このような意味において、*MT*では「O Vt S」という古いタイプの、そして次第に文法的ではなくなっていった語順がまだ生産性を保っていたと考えることが出来るであろう。次節では4.2節と4.3節で考察した*MT*の他動詞のVS語順を、小林(2014)の*Malory*におけるVS語順についての研究に照らし、これらの2つの作品のVS語順には、量的な違いのみならず、質的な違いが認められることを示す。

#### 4.4. *Malory*と*Mandeville's Travels*

*Malory*において観察される他動詞のVS語順は、(i) (39-40)のように助動詞を伴い、その助動詞が主語に先行するが、他動詞は主語に後続するもの、(ii) (41-42)のように他動詞の他動性が低いもの、(iii) (43-44)のように一種の定形表現のような形で使われているもの、が多い。

(39) Than shall ye knowe that this is he that lovyth the lady of the castell

(Malory 217:7)

(40) But the sorow that dame Lyonnesse made there may no tunge telle

(Malory 207: 19-20)

(41) Than had sir Gawayne suche a grace and gyffte that an holy man

had gyvyn hym

(Malory 704: 8-9)

(42) but well undirstood sir Trystram that sir Dynadan myght nat endure

ayenste sir Launcelot

(Malory 458: 34-26)

(43) And all thys aspyed sir Palomydes

(Malory 456: 37)

(44) That saw the Kynge with the Hondred Knyghtes and ran unto sir Kay

(Malory 19:4-5)

(小林 (2014: 12-14))

(43-44) は「誰々はこれ (この様子) を見ていた」ということを表現する目的語前置の他動詞構文である。*Malory* においては、(43-44) のように *thys* や *that* が前置され、その後位置で *aspyed* や *saw* といった他動詞とその主語が VS 語順で起こる構文が、定形の表現形式としてよく現れる。(45) に示すように、①から③にあてはまらない例も存在するが、このようなものは *Malory* に観察される他動詞の VS 語順における典型ではない。

(45) And so toke he us severally

(Malory 83: 17)

Haerberli (2010) によると、*Malory* において疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の語句が前置された主節で他動詞と名詞句主語の倒置が起きる割合は 14.9% ということである。しかしこの数字には (42) のような他動性の低い他動詞の倒置語順、また (43-44) のような *Malory* において繰り返し現れる定形の表現も含まれていることと思われる。従って *Malory* における他動詞の SV 語順の生産性は、Haerberli の示す 14.9% という数字が示唆するものよりもずっと低いものになっていたのではないかと思われる。

一方 *MT* では、疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の要素が文頭に現れる主節において、他動詞と名詞句主語が VS 語順に起こる割合は 34.0% ということである (Haerberli (2010: 147))。4.2 節と 4.3 節で見たように、*MT* においては文頭要素が副詞 (句) である場合も目的語である場合も、多種類の他動詞が VS 語順に起こる。その中には他動性の低い状態動詞も含まれるが、*make*、*raise*、*take*、*win* など他動性の高い動詞も起こる。また、*Malory* の目的語前置の VS 語順 ([O Vt S]) に起こる他動詞が、多くの場合 *aspyed* や *saw* のような「見る」という意味をもつものであるのに対して、*MT* においては、或る一部の意味カテゴリーに属する他動詞が [O Vt S] という語順に起こる動詞の典型であるということはない。

*Malory* と *MT* は同じ 15 世紀の作品であり、共にフランス語から翻訳された

ものである。しかし後者は前者よりも数十年前の作品であり、そのために他動詞の VS 語順が起こる頻度がより高いとも考えられる。まだ或る程度他動詞の VS 語順が生産性を保っている *MT* と、この語順が見られる割合がかなり減少している *Malory* を比較することにより、或る構文・語順が英語の文法から消えて行く際、始めは使用頻度が低下するという量的な問題であるのに対し、どの程度まで使用頻度が落ちるとそこに質的变化が見えてくるのかを考える手掛かりが得られるかもしれない。*MT* における他動詞の VS 語順は、当然ながら OE 期よりも起こる頻度は低い。しかし *MT* において VS 語順に起こる他動詞の種類が限定されているわけではなく、この語順の使用に関して質的な変化は特に起こっていないと考えられる。一方、*Malory* においては他動性の高い動詞はこの語順に起こり難く、また特に [O Vt S] という語順は使用される場合が限定される傾向が見られる。*Malory* は他動詞が VS 語順に現れる割合が *MT* よりもさらに減少しているという単なる量的な変化を示すだけでなく、[X Vt S] という語順が 14.9% という割合まで減少すると、この語順の使用に関して質的变化が起こることも示している。ME 後期の作品に関し、そこに起こる SV 語順と VS 語順の比率の変化だけでなく、VS 語順がどのような用いられ方をするかについての変化も綿密に追い、この語順の消滅のプロセスを明らかにしていくことを今後の課題としたい。

## 5 まとめ

本稿では *MT* の VS 語順に関し、まずディスコース上の機能について考察した。この作品においては、主要な叙述と補助的な説明部分に関し VS 語順と SV 語順の使い分けが見られる箇所もあり、OE と同様に語順がディスコース上の機能を果たす場合があることが観察された。また他動詞の VS 語順については、この語順に現れる動詞に多様性が見られること、また [O Vt S] の語順について、*Malory* に見られるような使用範囲が意味的に限定されたものになって行く兆候が見ら

れないことが、*MT*の特徴である。Haerberli (2010)によれば、文頭の要素が疑問詞、否定辞、*then-group* 以外である場合、他動詞とその名詞句主語のVS語順はOEにおいておよそ60%、*MT*では34.0%、*Malory*では14.9%である。名詞句主語に関して言えば、*MT*では他動詞のVS語順がOE期に比べ半減しているわけであるが、これまで述べてきたように、*MT*ではこの語順の使用頻度の減少にかかわらず、そこに使用される動詞の種類は多様性を保っている。また3節で示したように、VS語順のディスコース上の機能についても、この語順がOEにおいて担っていたのと同様の機能を*MT*に見ることができる。このような意味において、*MT*のVS語順は生産的であると言える。*MT*に比べて他動詞のVS語順の使用頻度がさらに半減している*Malory*に見られる、この語順の使用に関する質的变化と、*MT*において保持されているこの語順の生産性を相照らすことで、他動詞VS語順が消滅へ向かうプロセスの一段階を量的変化と質的变化の関わりという観点から考察した。

## 資料

*Mandeville's Travels, Translated from the French of Jean D'Outremeuse.*

Vol. I. EETS O.S. 153 ed. by P. Hamelius. London: Oxford University Press.

*The Travels of Sir John Mandeville: the version of the Cotton Manuscript in modern spelling.* The Project Gutenberg eBook, The Travels of Sir John Mandeville, by John Mandeville. <<http://www.gutenberg.org/files/782/782-h/782-h.htm>>.

## 参考文献

Breivik, Leiv E. (2003) "Old English *þa* Revisited," *Language and Function*, ed. by Josef Hladký, 39-55, John Benjamins, Amsterdam.

Haerberli, Eric (2002) "Observations on the Loss of Verb Second in the History of

- English,” *Studies in Comparative Germanic Syntax: Proceedings from the 15th Workshop on Comparative Germanic Syntax*, ed. by C.J.W. Zwart and W. Abraham, 245-272, John Benjamins, Amsterdam.
- Haeberli, Eric (2010) “Investigating Anglo-Norman Influence on Late Middle English Syntax,” *The Anglo-Norman Language and Its Context*, ed. by R. Ingham, 143-163, York Medieval Press, York.
- Haeberli, Eric (2014) “When English Meets French: A Case Study of Language Contact in Middle English,” *Papers Dedicated to Jacques Moeschler*, eds. By J. Blochowiak, C. Grisot, S. Durrleman-Tame and C. Laenzlinger, 1-18, University of Geneva.  
<[http://www.unige.ch/lettres/linguistique/moeschler/Festschrift/Haeberli2014\\_new.pdf](http://www.unige.ch/lettres/linguistique/moeschler/Festschrift/Haeberli2014_new.pdf)>.
- Hopper, Paul J. (1979) "Aspect and Foregrounding in Discourse." *Discourse and Syntax*, 213-41.
- 小林美樹 (2014) 「Malory における文頭要素と倒置・非倒置語順に関する考察」『神田外語大学紀要』第27号, 1-22, 神田外語大学.
- Komen, Erwin R., Rosanne Hebing, Ans M.C. van Kemenade and Bettelou Los (2014) “Quantifying Information Structure Change in English,” *Information Structure and Syntactic Change in Germanic and Romance Languages*, ed. by Bech, Kristin and Kristine Gunn Eide, 81–110, John Benjamins, Amsterdam.
- Kroch, Anthony, and Ann Taylor (2000) Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, <http://www.ling.upenn.edu/hist-corpora/PPCME2-RELEASE-3/index.html>
- Kuno, Susumu and Takami, Ken-ichi (2004) *Functional Constraints in Grammar: On the Unergative-Unaccusative Distinction*, John Benjamins, Amsterdam.
- Zwart, C. Jan-Wouter (1991) “Expletive raising and expletive replacement in Dutch,” *In Proceedings of the Eastern States Conference on Linguistics 8*, 393–404.